慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	春夏儀礼 : セミーク・ トロイツァ祭
Sub Title	Весенне-летние календарные обряды : Семик-Троица Vesenne-letnie kalendarnye obriady : Semik-Troitsa
Author	佐野, 洋子(Sano, Yoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.23 (2008.) ,p.151- 176
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20080531-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

春夏儀礼

――セミーク・トロイツァ祭――

佐　野　洋　子

はじめに

ロシヤの人々がその存在を信じ，共にこの世を生き抜いてきた自然の精霊の中に，ルサールカと呼ばれる女性の精がいる。精霊の多くは，人々が彼らとの出会いを語る“体験談”からその形象や信仰についてかなりの部分を知ることができるのだが，ルサールカに関して語られる体験談は極めて少なく，それも断片的なものでしかない。しかし，他の精とは異なって，その形象は口承文芸にではなく，主に農耕儀礼の中に濃厚に保たれている。これは，水の精霊ヴォヂャノイ・森の精霊レーシイ等の他の精霊に対する信仰が個人的なものであり，また，ペチカの火の主人・先祖霊ドモヴォイに対するそれが家族的・氏族的であるのに対し，ルサールカに対するそれが社会的・集団的であることにも表れている。ルサールカは，ロシヤの精霊の中で唯一の女性＝命を生み出す性で，露を振りまき自然に命を吹き込んでいく春の，植物の精である。体験談に語られる彼女は，水辺に棲む死んだ娘の魂であるといった点が前面に押し出されているが，その形象を溯っていくと，その祖型は，命を生み出す豊穣の女神像を彷彿とさせるものがある。ルサールカの形象は，自然の持つ春の生命力を見送り，次の段階へと繋げていく“ルサールカ送り”という儀式に顕著に表れているが，ここでは，春から夏にかけて娘たちが行なう一部の儀礼が持つ意義を，ルサールカの形象を通して考察していく。

1．セミーク・トロイツァ祭

自然の精にふさわしく，ルサールカの生活のリズムは自然のサイクルと重なり合っている。大地が冬の衣を脱ぎ捨て春を迎えるとき，水の底でルサールカも春の息吹を感じとる。水を捨てたルサールカたちは，草刈りの始まる６月29日のペトロの日まで，あるいは少し早めのペトロ斎期の初日[1]まで川に隣接する森や野や畑に移り住むと言われている。彼女たちが水を出る時期も，水に戻る時期も，地方によって様々に信じられているが，大差は無い。ルサールカの姿をみかける５月，６月は，すべての創造物の満開期である。そして穀物小屋が空になり，農繁期の夏がはじまる。その頃ルサールカは，翌春，草々がふたたび芽を出す時まで，死者の世界，闇の中へと姿を消す。

ルサールカに関する暦は，パスハから起算される。キリスト教最大の祭りであるパスハは，移動祭日のため定められた日付がなく，春分の次の満月に続く日曜日，もし春分の当日が満月に当たるときは，その次の満月に続く日曜日と決められているので，年によって日付が変わってくる。３月22日から４月25日の間になる。この日，ルサールカたちは水から出ることを許されているので，この日はできるだけ堅く教会のドアを閉めなくてはならないとされている。オリョール県の農民たちはルサールカたちが現れるのではないかと恐れて，この時にはまわりを見回すことを欠かさない。[2]

ルサールカが最も活躍するのは，セミークやトロイツァの頃である。

セミーク[3]は農耕に関係した春の祭りで，パスハ後第７木曜日（５月４日～６月７日にあたる）に祝われる。白樺が祭りの中心である。

---

(1) トロイツァの翌日曜（＝全聖人の日）の翌日の月曜日を指す。この日から，固定祭日６月29日のペトロの日まで，年によって８日から42日間続くペトロの斎期がはじまる。日付はすべて旧暦で統一する。

(2) Максимов С. В. Крестная сила. Нечистая сила. Неведомая сила. СПб., 1991. С. 227-228.

(3) セミークは，数詞の７（セーミ）より。

40年ほど前［18世紀末頃］，セミークにはモスクワ中が底抜けに陽気な祭りのさまを呈していた。家族のそろったどの家の庭でも，卵焼きやドラチョーナ［小麦粉，すったじゃがいも入りの卵焼き］がのったテーブルのまわりに，木の茂みのように白樺が立てめぐらされた。至る所でセミークの歌が鳴り響き，スズラン，シナガワハギ，ワスレナグサの花輪，あるいは白樺や菩提樹の枝でつくった冠をかぶった群衆が，リボンや布きれで飾り立てた白樺をかかげ，歌いながら通りを練り歩いた。(4)

この日は“緑の木曜日”とも言われ，以前ヴォログダ県のトーテムスキイ郡では，“ルサールカ”とさえ言われていた。カルーガ県の歌では，

ルサールカから　セミークのルサールカから　身を守るのに
自分のまわりに　線を引け　円を描け(5)

と歌われている。

またパスハ後50日目の日曜日はトロイツァ(6)（聖神降臨祭，五旬祭―5月11日～ 6月14日にあたる）である。多くの地方でこの二つの集いは一緒に祝われており，セミーク・トロイツァと並び称される。コストロマーでは，

あたしらにゃ　祝い日が　年にみっつ
ひとつ目の祝いは　――　尊いセミーク
もうひとつの祝いは　――　トロイツァ

(4)　Снегирев И. М. Русские простонародные праздники и суеверные обряды. Вып. 3. М., 1837-1839. С. 102.

(5)　Зеленин Д. К. Описание рукописей учёного архива ИРГО. Пг., 1914-1916. С. 594.

(6)　トロイツァは，父と子と聖霊の三位一体の意。セミークの3日後。

みっつ目の祝いは ―― クパーリニッツァ[7]

と夏の三祭日として並び称され，マースレニッツァ[8]と同様セミークは“尊い”と形容されている。ロシヤでは祭を週毎に祝う習慣があり，セミークを含む週はセミーツカヤ週（別名：緑の週），トロイツァを含む週はトロイツカヤ週と言われる。ルサールカが水から出て森や野に移り住むのはこの頃である。神話学者アファナーシエフは，ルサールカがこの頃祝われる理由を次のように述べている。

> 雲の娘たち［＝水をもたらすルサールカ］の王である雷神に捧げられた日，木曜日はルサールカの言い伝えの中で特に重要な意味を持っている。異教時代のルサールカに捧げられた祭りはすでに森が葉に身をくるみ，野原が花々で身を飾り，畑には穀物の草々が生い茂ったとき，春の祭りを兼ねて行われた。キリスト教時代になってからは，ルサールカの祭りはトロイツァと聖神祭に合わせられた。聖神祭［Духов день[9]］という名称が，無学の民衆に自然の精［стихийные духи］と死んだ祖先の魂［душа］を祭ることを思いつかせたのである。しかし，それにもかかわらず民衆は，昔にそむかず今に至るまで，ルサールカの祭りを慣習どおり，トロイツァの前の週，12世紀にはルサーリナヤと呼ばれていたいわゆるセミーツカヤ週の木曜日から始めること

---

(7) Снегирев С. 100.
　イヴァン・クパーラ（6月24日）前日の殉教者アグリッパの日は，翌日のクパーラとの関連で，アグラフェーナ（アグリッパのロシヤ語口語形）・クパーリニッツァと呼ばれる。クパーラの前夜が重要な意義を持っているので，農民の意識の中では両日とも同意義に捉えられている。

(8) 冬を送り，春を迎える一週間続くお祭り。大斎（パスハ前）直前の一週間祝われる。斎期が設けられているため，祭が前倒しとなり，春の祭なのにその季節感が感じられにくくなっている。以前は3月20日～25日頃祝われていた。

(9) 聖神祭は，トロイツァの翌日の月曜日。Духов день の直訳は，魂・霊・精霊（Дух）の日。

によってペルーン［雷神］の日と結び付けている。[10]

ルサーリナヤ（あるいはルサーリスカヤ）というのは，古代スラヴ人の春の祭である“ルサーリヤ”から派生した形容詞の女性形（女性名詞“週”に係る）である。ルサールカの語源は未だ明らかになってはいないが，水，それも露と強い関連性があり，そしてルサーリヤ祭，つまりルサーリナヤ週に祝われる存在であると考えられている。

ルサールカが水を離れる時期は微妙に異なっており，それはセミークであったり，トロイツァ，または聖神祭，あるいはトロイツァ後の週であったりする。多少のズレはあるが，トロイツカヤ週，セミーツカヤ週，及びルサーリナヤ週[11]と呼ばれる，いずれもトロイツァ前後の二週間（パスハ後第７・８週）である。旧暦の５月の中旬頃には寒さや北風が終わると信じられていたので，ルサールカが水から出るのは丁度５月から６月にかけての暖かくなる季節である。この頃，村娘たちは“白樺を編み”に森へ行く。

２．白樺編み・白樺ほどき

白樺編み

セミークは主に娘の祭りである。この日に向けて村々の娘たちは，卵を用意し，焼き菓子を焼き，甘い菓子を持ち寄る。そして白樺を編んだり，歌を歌ったり，祝宴をしに林の中の川岸へと向かう。白樺には，花輪，枝輪を掛け，トロイツァの日にこれを水に投げて自分の運命を占ったりする。祝宴のあとには，娘たちは輪舞を踊る。

---

(10)　Афанасьев А. Н. Поэтические воззрения славян на природу. Т. 3. М., 1994. С. 140-141.

(11)　キーエフ地方のロマーシキ墳墓から1899年にみつかった４世紀の儀式用の水差しカレンダーには，1962年に歴史学者ルイバコフが解読に成功したところによると，イヴァン・クパーラが６月24日，その前の６月19日～ ６月24日がルサーリナヤ週にあたっている。おそらく，もともとはルサーリナヤ週はこの時期に固定されていたもので，クパーラ祭への準備週間であったと考えられる。

この，かつてルサーリナヤ週と呼ばれていた週の木曜日に，娘たちは白樺を編み，クマー（特別に親しい間柄）[12]の関係を結び，その数日後に編んだ白樺を解き，関係を解消するという不思議な儀式を行なう。

○リャザン県のザライスキイ郡では，セミークに，ある者たちは，枝を折らないまま輪をつくる。この輪の中央に向かい合って，首からはずした十字架をぶら下げ，ひと組の女か娘がクマーの関係を結ぶ。つまり，この十字架をひとりは一方から，もうひとりは反対側から接吻する。このあと十字架を交換し，彼らの間には永遠の友情が確立する。[13]

○トゥーラ県では，携香女の日［パスハ後第２日曜日］に村の娘たちは，もう緑の葉に身を包んだ森へ向かい，そこで二本の若い白樺を折り曲げ，それを枝やプラトークや刺繍布と輪になるよう一緒に結びつける。クマーの関係を結びたいふたりの娘が輪の周りを互いに反対方向にまわり，三度ずつ輪を通して十字を描くように接吻する。このあと，ふたりは十字架を交換し，この時点からクマーと呼び合うようになる。[14]

○オリョール県のドミートロフスキイ郡では，トロイツァに若者たちは，草原のヤナギの木のもとに向かい，ヤナギの枝で輪を編み，それに十字架，あるいはプラトーク，あるいはリボンをかける。二人組（若者と娘，あるいは娘同士のどちらでも良い）は，輪を手にとり，お互い面と向かって立ち，「トロイツァよ，森へ行って枝輪を編む私たちを祝福して！」などと歌う。歌って，輪を通して接吻し合う。これが，“クマーの関係を結ぶ”と名付けられているものである。この際，十字架，あるいはプラトーク，あるいはリボンを交換し合う。[15]

○ヤロスラヴリ県のロストフスキイ郡では，クマーの関係を結びたい娘た

⑿　クム кум（男）・クマー кума（女）とは，新生児の洗礼の際に立ち会った人，洗礼親，教父（母）などと一般に訳される。しかし民間では，血縁関係は無いが，親類同様の親しい間柄にあるとされる人を指す。

⒀　Зеленин Д. К. Очерки русской мифологии. М., 1995. С. 280.

⒁　Зеленин Очерки. С. 279.

⒂　Зеленин Очерки. С. 279.

ちは，“クマーの日曜日”（フォマー週の日曜［パスハの翌日曜］の翌日曜）に白樺に枝輪を編み，この輪を通して接吻し合う。この白樺はトロイツァまで保たれ，この日水に投げ入れられる。[16]

○クールスク県のコロチャンスキイ郡では，トロイツァ（ここではセミークと呼ばれている）に娘たちは若い白樺を二本選び出し，ペアを組んで二本の木の梢の部分を編み合わせる。その後娘たちは，ペアでこの白樺に近寄って，クマーの関係を結ぶ。つまり，葉を通して接吻する。「こんにちは，クム［クマーの男性形］とクマー，白樺を編んだわね！」と言いながら。この際，イヤリングや指輪，あるいはキャンディーや糖蜜菓子などのお菓子を交換し合う娘たちもいる。[17]

白樺編みは地方によって行なわれる時間帯が異なっていて，オリョール県とコストロマー県では日の出前に，ヴラジーミル県では午後に，リャザン県では夕方遅く，あるいは夜に行なわれる。また白樺編みの編み方には３種類ある。①“枝輪編み”と言われるもので，一本，あるいは数本の白樺の枝を曲げて輪をつくり，草や布やプラトークで補強するやり方。②“お下げ編み”と言われるもので，一本から数本の白樺の枝を曲げ，縄あるいはお下げのように撚り合わせ，リボンや糸や紙を一緒に編み込むやり方。エニセイスク県では，お下げ編みは別のやり方で，白樺のてっぺんを大地まで曲げて，枝とその下の草とを編み合わせる。枝輪編みとお下げ編みを同時にやるところもある。③“門を閉じる”と言われるもので，二本の白樺のてっぺんを縄のように互いに綯い，しっかりさせるために草鞋の紐でアーチ型に結ぶやり方である。

ところで，白樺編みは何のためにするのだろうか。スモレンスク県では，それはルサールカがその上で揺れることができるようにとの目的でなされ，“ルサールカのための枝輪編み”と呼ばれている。ヴラジーミル県のムー

---

⑯　Зеленин Очерки. С. 279.

⑰　Зеленин Очерки. С. 280.

ロムスキイ郡には次のような信仰がある。

> 農民のあいだでは，トロイツァの前日に白樺の前でシシガ[18]たちが踊ると考えられていることから，白樺を編むことは大変な罪だという信念がある。だから，白樺編みは娘たちの間で重大な秘密として守られる。そうでなければ，もし大人に知られてしまったら，大変なことになってしまう。[19]

娘たちは危険を犯して無理をしてでも，ルサールカのために白樺編みに出かけていくわけである。それは，揺れるという行為＝ブランコ[20]を漕ぐことが，農業における非常に普及したまじないの一つだからである。揺れるということは，高く上に上がるということで，この行為や，下から上へ物を投げるなどの行為は，植物の上へ，上へと伸びる成長の自発的な力を人が刺激し，促進すると考えられていたからである。娘たちは，大人や若者たちから身を隠してこっそり向こうの世界＝自然界へ自らおもむき，ルサールカのこの行為を少しでも楽にしてあげよう，又，その力を自分にも貰おうというのである。

ルサールカが走ったところは草が生い茂り穀類がよく実るというが，これはルサールカには豊饒を促す力があることを語っている。セミーツカヤ週にルサールカたちは畑をぶらついたり，ライ麦畑を走り回り，トロイツカヤ週には秋播き畑や低木の茂みを歩き回る。ルサールカは暦と関係があるが，それはライ麦の成長と密接に結びついているからである。ライ麦の開花はしばしばトロイツァ祭の頃と一致する。彼女が大地へ水から出ると

---

⑱　悪霊一般を指す。水と結びつけられ，森にも住み，蒸し風呂を好む。ルサールカを思わせる。

⑲　Шейн П. В. Великорусс в своих песнях, обрядах, обычаях, верованиях, сказках, легендах и т. п. СПб., 1898. С. 344.

⑳　パスハからトロイツァまで若者たちはブランコ遊びに興じるが，これも豊作を願う農業儀式が遊戯の形で残ったものである。

きとは，緑が世界を覆い始めるとき，穀類が成熟へ向かうときである。彼女は好んで長い髪を梳り，その髪からは常に水が滴り落ちているが，そうやって彼女が大地に水分を与えると，みずみずしい若葉が顔を出す。彼女の出現は，春，自然がその力，美しさを発揮するピークの時である。野に現れるルサールカは，種を蒔いた畑を害する人や特に子どもを追い払い，野や畑を守る，と多くの地方で信じられている。ヴラジーミル県の村では，娘たちは白樺を編みながら，次のように歌う。

娘っ子が　歩いたところ
サラファンを　振ったところ
そこは　ライ麦が　生い茂る
どっさりたたいて　うんとこさ打つほどさ。
ひとつの　穂から
三袋も　粉が　挽けちゃうよ！[21]

娘たちが，ライ麦畑を走り回って，穀類の成長を促すルサールカになりきっている。

ヴラジーミル県で娘たちは朝早く，夜明けに白樺を編みに出かけるが，白樺を編みながら次のように歌う。

尊いセミーク，イーストなしのピローグよ，
若者たちが歩けば　――　そこには煙が立ちのぼる，
娘たちが歩けば　――　そこにはライ麦が生い茂る！
ねえ，あんたたち，かわいいお友だち，
仲良くなって，喧嘩しないでね，
トロイツァに　お客にきてよ

---

(21)　Завойко Г. К. Верования, обряды и обычаи великороссов Владимирской губернии // ЭО. 1914. Кн. 103-104. №3-4. С. 151.

亜麻の繊維の束持って，錘もいっしょに！[22]

あたかも緑を紡ぎ出すルサールカに呼びかけているようである。また，トロイツァに“白樺を編む”ことをいくつかの地方では，“お下げを編む”とか“ルサールカのために枝輪を編む”とか“門を閉じる”と言うが，民俗学者ヴラーソヴァはこの“編む”という行為は豊饒の力を閉じ込める，集中させるためではないかと推測している。

収穫の最後に耕地の中央に刈り入れずに穂を少し残し，今年実った穂の力を，翌年の収穫に繋げるようにと大地まで穂を垂れ下がらせ，それを編んだり折るなどする“ひげ編み”という儀式や，その際，穂で輪を編むことがあるが，これもこの白樺編みの儀式とその意義において酷似していると思われる。

花輪・草輪・枝輪とは，春・夏サイクルの祭の参加者の印で，シンボル的持ち物である。また時には，仮装者（主人公）を他の参加者と区別する印ともなる。例えばルサールカ送りの際，ルサールカに仮装した者にイラクサを編み込んだ花輪をかぶせたり，またはたくさんの花輪を作り，頭や首や手など身体中にぶらさげることをする。儀式で花輪を使うのは，他の丸くて穴のあいた形の物（指輪，たが，儀式用輪型パン等）と同様，その形に魔術的な意味があるからである。それに加え，花輪には花輪の素材となる植物の持つ特質と，花輪を作るときの綯う，編むという行為自体の象徴的意義が重なっている故である。

白樺を木の上で直接編み込まない場合でも，その代わりに白樺や花でつくった輪を頭からはずして代用したり，根を引き抜かずに草花を門のように結んだり（ニージニイ・ノヴゴロド県），糸を輪の形に編み，それにリボンを飾り，スグリやエゾイチゴの低木にかけ，最後にトロイツァの白樺にこのリボンを飾ったりする（ヤロスラヴリ県）。いずれにせよ，どの場

---

(22) Завойко С. 151.

合にも，輪の形か編む行為が付随している。

聖神祭に歌われる歌のひとつに，娘たちがおばあさんに，自分たちを魔法の輪で囲み，光り輝くオートムギとホップを振りかけてくれるよう頼んでいるものがある。

ねえ，クプリヤーノヴナおばあちゃん
私たちのまわりに　金のナイフで　円を描いてよ
私たちに　光り輝く　エン麦を蒔いてよ[23]

広く知られているように，農民の信仰によると，魔術的な輪は悪霊たちから身を守ってくれる。その際，左から右へ歩くと，悪霊たちを追い払うことができ，その逆の動きは彼らを輪の中に閉じこめることができるという。豊饒の力を閉じこめるというリング・輪の力，自然・異界の力を得るという儀礼の意味が，悪霊たちから身を守るためへと変遷していったのは，異界の者たちが時代とともに悪霊となりさがり，儀礼の意味，儀礼の持つ力が逆にとらえられていった結果であろう。

娘たちが白樺を編む行為は，ルサールカの，植物の，つまりは自然の力，命を生み出す力，豊穣の力を輪に編み込むことを意味し，自分たちもその力を授かりたいという願いから行なわれるものである。自然の豊穣の力＝子を産む力を分けて欲しいのである。それだからこそ，娘たちはこの編んだ白樺のその後の様子によって将来を占うのである。これは娘たちの必死の思い，願いであって，だから，白樺を編みに行く際，彼らは（この行為を行なうのは，稀な例をのぞけば娘か，まだ子のない女たちである）人に，特に若者たちにみつからぬようにそっと森へ向かい，編む際も静かに行い，その後も白樺編みの場所も，時間も隠し通すのである。これは，彼ら一人一人とルサールカ＝自然との関係，契約なのであるから。

---

(23)　Кагаров Е. Г. Религия древних славян. М., 1918. С. 9.

オリョール県の通信員の報告では，〔ルサールカたちはぼさぼさ頭をして，すっ裸のまま川から急に飛び出してきて，人を馬から突き落とす。そして自ら馬鍬にすわって馬を駆り立てる[24]〕というから，ルサールカは確かに農耕に直接関係がある。人には任せておけない，私が畑を耕すのだと意気込んでいる。水を与え，緑を紡ぎ，馬を駆り立てるルサールカは，命を産む母である。

白樺ほどき

娘たちは，編んだ白樺を数日後ほどきに行く。

○ニージニイ・ノヴゴロド県のクニャギニンスキイ郡では，セミークに娘たちは卵焼きを持って森に出かけ，そこの低木の下でまず卵焼きを食べる。その後，二人ずつ白樺のそばへ行き，やわらかいしなやかな細枝で人の頭より少し大きめの輪（いわゆる枝輪と呼ばれるもの）をつくる。各々手から指輪をはずし，それらを枝輪の中央で白樺の葉を通して結びつけ，枝輪を通して接吻しながら次のように言う。「お友だちになりましょね，クマー。仲良しになりましょね，クマー。愛し合いましょね，あなた」そしてしばらく遊んでから家へ帰る。トロイツァにこの枝輪をほどきにやってくる。ちょっと遊んだり，歌を歌ってから，それぞれのペアは自分たちの枝輪のところへ行って「別れましょうね，クマー。仲違いしましょうね，クマー。お互い嫌いになりましょう，あなた」と言いながら白樺をほどき，去る。[25]

ここでも白樺の枝輪の示すシンボル（輪・円）をさらに強調するかのように，指輪が登場する。

白樺編み，白樺ほどきの一連の流れがよくわかるスモレンスク県の例を

---

(24) Померанцева Э. В. Мифологические персонажи в русском фольклоре. М., 1975. С. 73.

(25) Зеленин Описание. С. 815.

あげよう。

○聖神祭とトロイツァに，娘たちは自らを花輪・枝輪で飾る。聖神祭の昼食後，娘たちは歌って踊りながら森へ“枝輪編み”に向かう。そこへ彼らはいろいろな食べ物を持っていくが，その中に必ずなくてはいけないのが，卵焼きである。そして白樺の前で次のように歌う。

喜んじゃだめよ　楓さん
そして　トネリコさん
あんたたちのところに　行くんじゃないのよ
きれいな娘っ子たちは……
ねえ　喜んで，真っ白な白樺さん，
あなたのところに　行くのよ
きれいな娘っ子たちは，
あなたに　持ってくのよ
おいしい　卵焼きを，
苦い　ウォッカを，
鳴り響く　ヴァイオリンを。

娘たちは踊り歌う。

草を　踏みつけろ
草を　もぎとれ……
あんたら　草は
いつだって　シーズン　――　でもね
きれいな娘っ子たちには
年頃は　一回，いっときだけよ。

このあと娘たちはエプロンを振りはじめ，白樺をその枝がつかめるよう

になるまで傾ける。この枝を近くに生えている木の枝と大きな輪型に編み合わせる。輪を編み終えたら，クマーの関係を結ぶ。それにはふたりずつこの大きな枝輪を通り抜け，前へ後ろへと三回行ったり来たりして，歌う。

お友だち，
かわいい人，
仲良くなってね，
喧嘩しちゃだめよ。
けど　仲をほどいたら
殴り合ったって　いいのよ。

仲良くなった二人は持ってきた食べ物を食べ，ウォッカを飲む。それから歌う。

編んだわ　枝輪を
編んだわ　緑のを
良い年に　なるよう
穀物が　生い茂るよう
穂をいっぱいつけた　大麦が
髭をつけた　オートムギが
真っ黒な　蕎麦も
真っ白い　キャベツもできるよう。

枝輪は丸一週間，編まれたそのままの状態で残されておく。その間，枝輪に乗って揺れているルサールカたちが厚かましい者をくすぐりはしないかとの恐怖から，枝輪には決して近寄ることをしない。もし誰か編まれた枝輪の近くを通らなければならない事態が起きた場合には，その

者は，この枝輪がある場所を決して見てはならない。

ルサーリナヤ週の最後，聖神祭後の最初の日曜日に，ルサールカたちは枝輪を後にする。彼らの楽しみのときは終わり，娘たちはもう恐怖を持たずに枝輪をほどき，そして仲を解消しに行くことができる。仲解消の儀式は，枝輪を通って三回行ったり来たりして次のように歌う。

お友だち，
かわいい人，
仲良くなったわね，
喧嘩しなかったわね。
けど　仲をほどいたら
殴り合ったって　いいのよ。

その後，枝輪をほどきにかかり，歌う。

ほどいたわ　枝輪を
ほどいたわ　緑のを
穀物が　生い茂るよう
穂をいっぱいつけた　大麦が
髭をつけた　オートムギが
真っ黒な　蕎麦も
真っ白い　キャベツもできるよう。

これで春の祝いは終了する。[26]

上の例でも言われていたように，セミークの行事，白樺編みの時には娘たちは皆それぞれ食べ物を持ち寄って，森や畑の白樺のそばでテーブルク

(26)　Зеленин Очерки. С. 275-277.

ロスを敷いて会食をするが，このとき欠かしてはならぬのが，卵焼きである。卵焼きを食べる際，娘たちは歌ったり踊ったりした。モスクワ州では，娘たちは卵焼きを食べたあと，白樺のまわりを踊りながら，

白樺よ　白樺よ
生い茂ろ　ちぢれっ毛！
あんたのところに　娘たちがやってきた
あんたのところに　美しい娘たちが。
ピローグを　持ってきた
卵焼きを　持ってきた。

と一度歌い，座って卵焼きを何口か食べ，また同じ歌を歌って踊る。これを三度繰り返す。[27]

「卵はパスハからはじまって，春に行なわれる儀礼の間ずっと通して使われる。卵は新しい生命の誕生のシンボルとして現れ，春が終わるときには卵はもう卵焼きの形で食べられた。萌芽は実に変化しなくてはならなかったのである。卵と卵焼きを食することの農業的意義は疑いがない」[28]と民族学者ソコローヴァは述べている。ところで，カルーガ県のマロヤロスラヴスキイ郡では，白樺編みの際に次のように歌うという。

母なるライ麦が　穂を出した，
ライ麦畑で　豚が　仔を産んだ。
70匹の子豚　子豚がみんな
子豚がみんな　みーんな　まだらのブチだ，
しっぽはみんな　ぴんぴーんだ。[29]

---

(27) Соколова В. К. Весенне-летние календарные обряды русских, украинцев и белорусов XIX— начало XX в. М., 1979. С. 205.

(28) Соколова С. 205.

(29) Шейн №1763. С. 371.

歌の内容からも，また白樺編みがライ麦畑近くの森で行なわれることが多いという事実も，卵焼きを必ず食べるということも，白樺編みの行為で娘たちが将来の幸せ，多産，そして豊作を切に願っていることが分かる。また，ルサールカが白樺の上で揺れることによって，自然の生み出す力をさらに増大させて欲しい，命を生み出すその彼らの行為を邪魔してはならない，という娘たちの思いが透けて見える。

白樺を編んで解く時期は，地方によってその時期は異なっているが，セミークに編み，３日後のトロイツァに解くことが多い。白樺を編む時期が一番早いものは，４月23日のエゴーリイの日で，解くのが一番遅いのは６月29日のペトロの日だが，この白樺編みの時期はルサールカの地上への出現時期とぴたりと重なっている。

白樺を編む際に娘たちは互いにクマーとなり，白樺をほどく時にその関係を解消している。仲解消とは，互いに結んだクマーの関係の中止，つまりその関係を結んだ契約の終了，破棄を意味する。この仲結びと仲解消の儀式は，白樺編みやほどきの行事と独立して行なわれることもあり，パスハから聖神祭までの祭日のいずれかに仲を結び，解消するのは，セミーク，トロイツァ，聖神祭が主である。

ヤロスラヴリ県のロストフスキイ郡では，パスハ後の第三日曜日にクマーの仲を結び，トロイツァに解消する。枝輪を水に投げ入れ，「ねえ，あんたクマーちゃん！ 私たち仲違いしましょうね，喧嘩して，罵り合って，絶交よ！」と歌う。互いにクマーの関係にあるのは，ほとんどの場合，セミークからトロイツァの三日間が多いが，オリョール県では５週間，クールスク県のオボヤンスキイ郡では６週間，そのいくつかの村では一年間続く。カルーガ県では，セミーク一週前の木曜日の昇天祭（パスハ後40日目）に仲を結び，聖神祭に解消するのだが，時おり娘たちは仲結びをした女友だちを丸一年間クマーと呼ぶこともある。トゥーラ県のノヴォシリスキイ郡では，トロイツァに枝輪を通して仲を結び，一週間後に森に枝輪をほどきに行くが，この行為が仲を解消すると呼ばれている。しかし，この

言葉の意味は完全に忘れ去られ，この地方では，同時に行なわれる“カッコウの洗礼”と呼ばれる儀礼の際に洗礼しあった者同士が，生涯クマーとなっている。

3．カッコウの洗礼

ここに新たに別の儀礼が仲間入りをしてきた。“カッコウの洗礼”とか“カッコウの葬式”と言われるものである。

○カルーガ県のコゼリスキイ郡では，カッコウの洗礼儀式の参加者は，並んで生えている白樺，あるいはハシバミの二本の枝を撚り合わせ，プラトークでそれを覆い，そこに［野生ラン・ハクチサンドリ Orchis latifolia からつくられ，サラファンを着せられた］“カッコウ”を置く。その後クマーの関係を結ぶことを望む者たちは，ペアで順番に“カッコウ”に歩み寄り，いったん左右に分れたあと，お互いに向き合い，近寄り，折り合わされた枝のところにかがみ込み，プラトークを持ち上げ，カッコウに接吻し，その後互いに三度，毎回位置を変えながら接吻する。このあと仲結びをした者同士は，互いにプラトークを渡し合い，生涯のクマーとなる。あるいはいくつかの地方では，この関係は一年しか続かない。[30]

野生ラン・ハクチサンドリのロシヤでの別名は，カッコウ，カッコウの涙，カッコウの贈り物という。ハクチサンドリがこの名を持つようになったのは，この草がカッコウのように模様がまだらだからである。また，裕福な貴族のやさしい娘が，騎士修道士との戦いで倒れた三人の兄を悲しんで森へ行き，哀れんだ神によってカッコウに変えられたというリトアニアの言い伝えから，ロシヤでは恐らく，哀れな彼女の涙を草の名にしたのだともいう。またロシヤでは，カッコウが鳴くとき，その目から枝に涙が

(30) Зеленин Очерки. С. 278-279.

したたると信じられており，枝にへばりついた昆虫の卵も“カッコウの涙”と呼ばれている。また，“カッコウの麻”と言うとスギゴケ（植物）を，“カッコウの花”と言うとセンノウ（植物）を指す。民間信仰によると，ハクチサンドリは愛を呼び起こし，生殖力を増大させると信じられている。この植物はスラヴでは惚れ草として使われ，女性はこの植物の根で生まれてくる子どもの性別を占っていた。東カルパチア山地のウクライナ人は，この植物で男性の性的不能を治していた。[31]

○オリョール県のトルブチェフスキイ郡で，仲結びの儀式は昇天祭に行なわれる。向かい立つ二本の若い白樺の梢の部分が曲げられ，結びつけられる。ここにカラフルなプラトークが掛けられ，このプラトークの下に仲を結ぶことを望むふたりの娘が立つ。プラトークの下でお互いに向き合い，

クックー，クマー，
子どもを　洗礼するわ。
どんな子を？　――　目の見えない子よ。
誰の？　――　あたしのよ。

と言いながら十字架を交換する。このように仲を結んでから，彼らは森で宴会をする。これが時おり，夕方遅くまで続く。夕方彼らはカッコウを一切の棺や箱に入れずに，直接土に埋めて埋葬する。[32]

ここでカッコウと言っているのは，鳥のカッコウではなく，植物のことである。精力を増大させるというこの植物を土に埋めるという行為は，その力を大地に伝えている，あるいは春の生殖力がピークのこの時期に，その

---

(31)　Соколова С. 200.; Снегирев С. 94.; Зеленин Очерки. С. 343.; Шапарова Н. С. Краткая энциклопедия славянской мифологии. М., 2001. С. 309.

(32)　Зеленин Очерки. С. 278.

力を封じ込めているようである。“ヤリーロの葬式”と呼ばれる儀礼の際の男根を埋める行為と呼応しているように思われる。自然界における豊作と人間界における結婚，子だくさんの願いは，同一線上にあり，結局は同じ意義を持つものである。

このカッコウの洗礼と言われる儀礼は，そのキリスト教起源の洗礼という名称からも，この儀礼が南ロシヤの隣り合わせのいくつかの県の非常にせまく限られた地域でしか知られていないこと，その上このせまい範囲内でその儀礼の性質が多様であることからも，時期的に言ってその出現は極めて新しいものである，と民族学者ゼレーニンは述べている。[33]この儀礼で共通するのは，その名称のみである。例えばカルーガ県のメショフスキイ郡のゴールノエ村では“カッコウの涙”という草の根に小さなルバーシカを着せ，小さな十字架をかけて土に埋めるだけである。

4．契りの儀式

ここまで同時期に行なわれる白樺編み，娘同士の仲結び，カッコウの洗礼について見てきたが，ここで問題となっているのが仲結びの儀式の意味である。一種の義姉妹の契りのような娘たちの仲結びは，仮装したカッコウが登場しようがしまいが，儀式の名が何であろうと，ほとんどの場合同じように編まれた白樺のそばで行なわれている。では，娘たちは一体誰とクマーの関係を結んでいるのであろうか？　相手は，娘，白樺，ルサールカの代わりのカッコウの三者が考えられる。ゼレーニンは，娘たちは互いに口づけや物の交換を行なってクマーの仲になるのだから，娘同士で仲を結んでいると考えるのが一般的であるが，しかし，もし娘たち同士でしているとするならば，なぜ絶交する必要があるのかと問う。それも多くの場合，３日ほどで切れてしまう仲である。義兄弟，義姉妹の契りとは非常に大事なもので，人々はそれに大変な敬意をもって接しているにもかかわら

(33)　Зеленин Очерки. С. 281.

ずである。さらに，ゼレーニンはなぜ常に森で，それも編まれた白樺のそばで行なわれるのか，と問い，そして，［これらの儀式でルサールカの名は言及されないが］白樺編みはルサールカのためになされ，仲結びもこの編んだ白樺のもとで行なわれるのだから，仲結びをルサールカと関係づけるのは当然であると結論づける。そうすれば仲解消の意味が理解できるが，もし白樺と仲を結んでいると考えると仲解消の意味が不明になると言う。そしてカッコウはルサールカの代わりに現れたもので，スラヴの信仰ではカッコウは鳥に変えられたかわいそうな娘であるから，カッコウの出身はルサールカに似ている。つまり，ゼレーニンは，カッコウ・ルサールカ＝孤独な不幸せな娘ルサールカと仲を結んでいるのだとする。結ぶ目的は，ルサールカから未来の運命を知るため，またルサールカをおとなしくさせ，仕返しをさせないようにするためである，と。そしてルサールカが人から去り，ルサールカの自由な時間が終わるのと同時に，ルサールカとの契約も終了する。そのために，つまりルサールカが定められた期日より長くこの世に居残らないよう仲を解消し，ルサールカに木の枝で揺れて遊ぶのはもう終わりであるということを示すために，編んだ白樺をほどくのだ，と述べている。[34]

このゼレーニンの説を全面的には支持するわけにはいかない。彼の考えはすべてルサールカとは不自然な死に方をした死者である，と断定している点から発している。確かにルサールカは不幸な死者ではあるが，これは明らかに時代が下がってから付け加えられていったイメージで，ルサールカの一部を語ってはいるが，彼女の原初的なイメージではない。この解釈だけではルサールカの形象が解き明かされることはない。

上述したように，白樺編みとそれをほどく行為を，娘たちは白樺が持つ力を授かりたい，という願いを込めて行なっていた。トゥーラ県では，セミークの白樺はクマーと呼ばれ，モスクワ近郊では祭りで重要な役を担う

---

(34)　Зеленин Очерки. С. 280, 284–285.

白樺を運ぶ男がクム，女がクマーと呼ばれている。北国の木々で一番早く緑をつける白樺，その甘い樹液は単なるおいしい清涼飲料としてだけではなく，肺結核，壊血病，潰瘍などにも効くという。娘たちは，美容と健康のため白樺の樹液で顔を洗った。命の水をもつくり出すことのできる白樺，白樺が内に含む生命力を，出産にもつながるその力を，輪に編み込むという行為によって閉じこめ，ピークに達したそのエッセンスを，最もその力が必要な時期に自分たちにも，作物にも十分にもらい受け，その後その輪をほどくことによって，また，水に投げることによって，もとの姿へ，大地へ，水へ，自然へと戻しているのである。同様にルサールカも，春に水から出，森へ移り住み，ライ麦畑を散歩し，白樺の枝で揺れ，大地に水を撒き散らして豊穣を促している。自然の，白樺の力，悲しい娘ではなく，自然の人格化としてのルサールカのこの力を得るために，娘たちは彼らと契りを結ぶのである。春から初夏のほんのいっときだけ，一面を緑が覆い出す，自然界の力が頂点に達するこの時期にしか現れないその一瞬をねらって，ルサールカの力を引き出そうとしているのである。ニージニイ・ノヴゴロド県では，セミークに仲結びの儀式を行なうが，「麻が育つために」仲結びをするのだと言う。そしてその力がすでに発揮され，季節が移り変わるとき，役目を果たし終えたルサールカと縁を切るのは，白樺をほどくのと同時に，彼女をもとの姿へ，自然へと，来年の春，その力がふたたび必要となるその時まで返している，解放している姿なのである。これは，ルサールカ送りにもつながる行為である。ウクライナのチェルニーゴフ県では，トロイツァに輪を編む行為は，“ルサールカ迎え”と呼ばれ，ペトロの日に輪をほどく行為は“ルサールカの見送り”と呼ばれている。

○トロイツァに，娘たちは再び同じ林へ，枝輪を編んだ白樺のもとへ向かい，ここで二つのグループに別れて，次の歌を歌う。

ああ，あたしらは　きれいにしたよ　きれいにしたよ
ああ，あたしらは　畑を耕したよ　耕したよ

ああ，あたしらは　黍を播いたよ　播いたよ
ああ，あたしらは　黍畑の草取りしたよ　草取りしたよ……

と続く。

歌ってから娘たちは，染めた卵を交換し合い，契りを解消する。そのあと，白樺を大地まで曲げて，根っこから折るか，あるいは若者たちが切り倒し，娘たちが自分のお下げからはずしたリボンやいろんな布きれで白樺を飾り立てる。飾られた白樺は，掲げられて村へ運ばれ，しばらく村の中を持ち運ばれたあと，牧草地へ移動して川へ投げ入れられる。[35]

異界の力，自然の力（白樺の木の力，ルサールカの力）を得て，もう畑は耕し，種を播き終えたから，ありがとうと感謝の気持ちを込めて白樺を飾り立て，その力を最後に村に落としていくかのように（ルサールカがライ麦畑を歩くように），村を練り歩いて，牧草地にもその力を運び，最後にルサールカの住みかとされる水へ投げ入れている。

次にカッコウの儀礼についてだが，いろいろ細部の違うこの儀式の唯一の共通点は名であるから，森で白樺のそばで行なわれていた仲結びの意義が忘れ去られたとき，これを新しく解釈して（はじめは冗談半分に）カッコウの洗礼と呼ぶようになったのだ，とゼレーニンは言っている。娘たちが春の森で洗礼するとしたら，大麦の穂が喉につまって死ぬという運命の，不幸で孤独な娘の変えられた姿であるカッコウ以外にはあり得ない，というわけである。そして，この名が定着したあと，娘たちがいろいろと説明を加えていき，新しい儀礼がつくられていったのだと述べている。[36]つまり，カッコウの洗礼という名がまず先に登場し，その後，いろいろな細部が付け加えられていったと言うのである。しかし，私はこれとはまったく

(35) Завойко С. 151-152.
(36) Зеленин Очерки. С. 281-282.

逆ではないかと考える。

この春から夏にかけての時期は，農民はあらゆる方法で，何が何でも自然の力を引き出したいのである。意味的に同一線上にある豊かさの象徴，作物の豊作と子だくさん，家畜の繁殖が彼らの唯一の関心事，願いである。毎年春に芽を出し，緑を茂らせ，実をつけ，そして種が土に戻り，再び芽を出すというこの生命の不思議な循環を当たり前のように行なっている自然の不思議な力を，何としてでも自分たちに取り入れる必要がある。はじめはそういった理由から，精力を増大させるというハクチサンドリ［ロシヤではハクチサンドリの根の煎じ汁を新婚夫婦に，ふたりが愛し合って仲睦まじく結婚生活を送るようにと飲ませる］を土に埋めることによって，白樺と同様に植物の持つ強い力，春の生殖力を大地に伝えようとしていたのではないであろうか。それがハクチサンドリの別名がカッコウということから，鳥のカッコウのイメージが前面に出てくるようになったのではないかと考える。そしてそのイメージがあまりにも類似していたため，ルサールカと重なり合っていったのであろう。

ウクライナとベラルーシの国境地帯では，カッコウが鳴き止むのはイヴァン・クパーラとされていて，カルーガ地方の迷信では，ペトロの日以降にカッコウが鳴き続けるのは不作の前兆とされ，ヤロスラヴリ県では雪の下で冬を越す秋まきのライ麦が穂を出し始め，草刈りが始まるときに鳴き止むという。ルサールカが地上にいる時期とぴたりと重なっている。またウクライナでは，カッコウは冬，この世を最初に去り，春，最後に戻ってくるという。カッコウが春早く飛んできて，まだ森が緑に包まれていない頃鳴き出すのは，ウクライナでは悪い年を，ヤロスラヴリ県では夏の不作の前触れとされる。これもルサールカが地上に存在するあまりにも短い期間と一致している。さらにベラルーシでは，カッコウは秋にどこにも飛んでいかず，冬を水の中ですごすと考えられている。これらのイメージは，ルサールカの自然サイクルと酷似している。ルサールカは鳥の姿をとることもあると考えられており，彼女の鳴き声はカッコウの鳴き方と同じ「ク

ックー！」である。

またカッコウは女性のシンボルであり，それも相手のいない女（クールスク地方他），親に追い出された娘（ポレーシエ地方他），母親に罵られた娘（ベラルーシ他），つまり家族や親戚関係の結びつき，結婚の結びつきを失った妻，母，姉妹，娘などといったイメージがある。さらに死との結びつきがある。ロシヤでは空きっ腹のときにカッコウが鳴いた数の年だけあと生きられる，と考えられ，カッコウの鳴き方で死期を占うことが広く知られている。

このカッコウの，死や不幸な娘のイメージとの結びつきが，ルサールカが不自然な死に方をした娘，あるいは洗礼を受けずに死んだ子ども，というイメージと完璧に融合し，もとはルサールカの力を得たいがために契約を結んでいたものが，のちに死んだ人間の娘というイメージが起こってからは，洗礼を受けずに死んだのだからキリスト教的に洗礼をするのだと解釈が変わっていき，その影響で，同じく女性であり，死との関連があるカッコウを洗礼することに移っていったのではないだろうか。カッコウと仲結びの儀式との結びつきは，それを通して家族の絆の欠如を補ってやることにある，と述べている研究者もいるが[37]，これはこの儀礼の表層しか見ていない意見であると思われる。よってゼレーニンが言う，カッコウの洗礼という儀礼の名称が先におこったという意見とは全く逆の過程をたどった，そして事は鳥のカッコウから発したのではなく，植物のカッコウ・ハクチサンドリから発したものである，と考える。故に，この儀礼の起源が比較的新しいものという点も疑問である。そして最後に，誰とクマーの関係を結ぶのかという意義が忘れ去られた時に，娘同士の仲結びと儀礼の意味が変わっていったのであろう。

ソコローヴァの考えによると，仲結びとは特別な形の義姉妹の誓約である。これは結婚の年齢に達した娘を一族の完全な成員として認める一種の

---

(37) Гура А. В. Символика животных в славянской народной традиции. М., 1997. С. 687.

イニシエーションであり，夏の初めの実りが期待される自然の最盛期，性的に熟した娘たちも女にならなくてはいけなかった。そして，娘時代の象徴である花輪を投げ捨てることもこのことを強調しており，仲結びは成熟した娘の結束を確たるものとした，と言っている。[38]フォークロアの世界では，自然界と人間界が同時に平行して考えられるから，白樺の木の下での仲結びを婚期に達した娘の，娘から女へと成長する際のイニシエーションであると捉えるのはいいが，仲結びを娘同士の結合，義姉妹の誓約のための儀式である，と捉えることはできないと考える。この儀礼の本質の意味は，娘たちが異界の力，自然の力，生命力，命を生み出す力を自分の内へ取り込むことによって，生命を産み出す存在になる，ということに帰結すると考える。

ベラルーシでは，枝輪編みやほどきの行事をすべて終えたあと，娘たちが歌う歌の中で，「（美しい娘が）お友だちになった，仲良くなった，真っ白な白樺と」と歌われている。オリョール県では，ルサールカは枝で揺れながら，女友だちを呼ぶとき，澄んだやさしいアルトの声で「クマー！　クマー！　おいでよ！」と呼んでいる。クールスク県のベルゴロツキイ郡では，カッコウの洗礼の際，

ああ，セミーク　トロイツァよ……
ああ，あたしにゃ　あたらしい　クマーが　できたのよ
ああ，あたしにゃ　カッコウの　クマーが　できたのよ
ああ，あたしにゃ　まだらな　クマーが　できたのよ[39]

と歌う。その土地その土地で，これらの儀礼の異なる段階，異なる面が反映されているのである。

---

(38) Соколова С. 198-200.
(39) Зеленин Очерки. С. 284.